

## 「華人研究の歩みと展望」

——第 11 回 JAMS 研究大会 第 2 日目報告——

坪井 祐司\*

研究大会 2 日目の第 3 セッションは、杉本均氏(京都大学)の司会のもとで、「華人研究の歩みと展望」と題して行われた。華人研究をテーマにしたものであったが、前日とほぼ同数の出席者が集まり、華人研究以外の研究者の参加も活発であったといえる。報告は、原不二夫氏(南山大学)による「戦前の日本とマラヤ華僑」、金子芳樹氏(獨協大学)による「マレーシア華人の研究:政治研究の見地から」、篠崎香織氏(東京大学大学院)による「シンガポール華人の研究について:19 世紀末～20 世紀初頭を中心に」の三篇であった。当日は、三氏の報告の後、会場から個別の報告に対する質問、そして全体に関する質問を受け付けるという順序で行われたが、本稿では、各報告を個別の報告に対する質問とともに紹介し、そのうえで全体に関する討論をまとめることとしたい。

原氏の報告は、戦前期マラヤにおける華人有力者の個人の履歴に焦点をあてて、その中で日本との関わりを持った者について紹介したものである。原氏は、マラヤの華人と日本の関わりに対する従来の研究が、抗日運動に限定されてしまっていることを指摘した。そして、華人有力者のなかには日本留学経験者や日本人と通婚した者が存在していることを具体的な人名をもって示し、この時期においても日本とマラヤ華人の肯定的な人的交流が存在したことはもっと注目されるべきと結論付けた。会場

からは、日本からの移民と現地の華人コミュニティとの関係についての質問がなされた。これに対し原氏は、現地在住の日本人と華人との関わりはあまりみられないと回答した。マラヤの側からみた日本との関わりという視点は、日本とマラヤの関係において従来取り上げられてきた日本のマラヤ進出とは逆の方向性であり、その面からも新たな視角を提示するものといえよう。

金子氏の報告は、政治学の視点からマレーシア政治研究およびマレーシア華人政治研究の研究史を概観するとともに、今後の展望を述べたものである。報告によれば、マレーシア政治研究においては、アメリカ型デモクラシーとの対照のもとで複合社会における政治統合過程が注目され、エスニック集団を単位とする多極共存型のデモクラシーが形成される点が強調された。一方で、エスニックなシンボルの操作により権威主義的開発体制が維持され、民主主義や市民社会の成熟が不十分である点が指摘される。そして、華人はそのエスニック集団の一つとして統合、分離の過程に焦点があたっている。金子氏は、今後の課題として、エスニック政治、開発政治の相対化の必要性を指摘し、具体的には華人という集団内部の世代による変化、地方レベルの活動、地域性の比較、国際的な動向とい

---

\* 東京大学大学院・博士課程

った視点を提示した。これに対して、会場の関心が高かったのは世代格差についてである。1969年の5.13事件を境とした華人コミュニティ内部の世代間ギャップについての質問に対し、金子氏からは、70年代以降 MCA が開発体制下で現実主義路線を採ったことで必ずしも華人コミュニティ全体の利益を代表するわけではなくなり、それに対する批判がなされていることが言及された。また、若年層への国内治安法 (ISA) の影響に関する質問に対しては、5.13 事件の記憶が固定されたまま次世代へと継承されていることが指摘された。

篠崎氏の報告は、19 世紀末から 20 世紀初頭のシンガポール華人の研究動向を通じて、華人研究の位置付けを問題としたものである。この時期は、現地志向の少数派と中国志向の多数派に分かれて華人のアイデンティティが確立した時代として、シンガポール、マレーシア、そして日本の華人研究者に注目されてきた。しかし篠崎氏は、こうした華人のアイデンティティに関する研究の問題関心は華人研究の場にものみ限定され、華人の植民地体制下での役割に注目する欧米の研究者の問題関心と乖離していることを指摘した。さらに、華人指導者と中国との結びつきはアイデンティティ論の立場から中国への愛国心、忠誠心として説明されてきたが、華人指導者の中国観には、マラヤに軸足を置きつつ中国を経済活動の対象としてとらえる視点も見られる点も指摘した。このことから篠崎氏は、華人に関する研究を「華人研究」の枠組みを越えた問題関心に位置付けること、定説を再検討することが必要であると結論付けた。この問題関心の位置

付けの具体的内容に関しては会場から質問がなされたが、これに対し篠崎氏は、マレーシア、東南アジアというより広い視点からの位置付けが必要であると回答した。また会場からは、この時期の華人指導者の中国観の変化については、マラヤの経済構造の変化とも関連しているのではないかと、経済史からの視点も必要なのではないかと、といった指摘がなされた。

全体討論では、主に現在の視点からの質問がなされた。まず、司会者からグローバリゼーションと華人の位置付けについての問題が提起された。これに対し、原氏からは会館等の組織に関して、国家を超えた動きが華人集団内部にも存在することが指摘された。会場からは、独立から 30 年以上が経過した現在においては、シンガポールとマレーシアの華人には地域的な差異が存在するのではないかと指摘がなされた。これには三氏とも肯定的であり、金子氏からは、シンガポールとマレーシアでは、華人—マレー人の多数派—少数派の関係が逆転するため、関係にも差が現れるのではないかと回答があった。国家による国民統合の動きと国際的な人口の移動が並行する現在の状況において、華人という属性が持つ意味がどのように変化しているのかという点は、華人研究における大きな論点の一つであろう。

最後に、華人という分析の枠組みについて少し考えてみたい。今回の報告、討論のなかでは、華人研究という枠組みそのものが問題とされることはなかった。それだけ華人という分析枠組みが強力であるといえるが、それを絶対化してしまうと、学問的

に「複合社会」を築くことにもつながる。三氏の報告で提示されたのは、華人という枠組みを利用したうえで、華人に関する既存の議論を再検討することでその相対化を図っていくという姿勢であろう。その方法として、二つの方向性が示されている。原氏、篠崎氏は、歴史学の立場から華人有力者個人の履歴や言説に着目し、個人の持つ多様性を華人という集団へと還元していくアプローチをとっている。これに対し、金子氏は政治学の立場から集団として華人をとらえつつ、その内部をより多角的に分析することで枠組みの相対化を図る方向性をうちだしている。今回は時間的な制約もあり、報告間の関連付けを行なうところまでは至らなかったものの、こうした方法論を交流させることは華人研究をより広い問題へと位置付けるために必要であろう。そして、こうした分析枠組みの相対化への視点は、エスニック集団が研究対象となる場合が多いマレーシア研究においては広く共有されうる問題意識であるといえよう。